

Title	フリッツ・フィッシャー著・村瀬興雄監訳 世界強国への道I：ドイツの挑戦, 1914-1918年
Sub Title	Griff nach der Welt-Macht : die Kriegszielpolitik des Kaiserlichen Deutschland 1914/1918, von Fritz Fischer, Düsseldorf, 1961 Fritz Fischer, A way towards the world power : the war-policy of Germany in the days of Kaiser, 1914-1918, Düsseldorf, 1961
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1973
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.66, No.10 (1973. 10) ,p.806(100)- 807(101)
JaLC DOI	10.14991/001.19731001-0100
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19731001-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

フリッツ・フィッシャー著・村瀬興雄監訳

『世界強国への道 I —— ドイツの挑戦、
1914—1918年 ——』

(Griff nach der Welt-Macht—Die Kriegszielpolitik
des Kaiserlichen Deutschland 1914/1918, von Fritz
Fischer, Düsseldorf, 1961)

第1次世界大戦をめぐるドイツ帝国主義の政策を論じた研究は、枚挙にいとまないであろう。しかし第1次世界大戦をめぐる複雑な国際政治と外交交渉を、原史料を駆使して克明に追求し、ドイツ帝国主義の意図とその挫折の過程を究明した研究として、本書はまさに類書中の白眉をなすものであろう。まだ前半しか邦訳されていないため、全体的な評価を行うことはさし控えなければならないが、帝国主義戦争としての第1次世界大戦は、独占資本主義の諸矛盾の避けがたい暴力的な解決として、必然的におこらざるをえなかったという歴史的必然論をもって、一義的に割りきることができないことを、この書は訴えているように思われる。つぎのような内容から成っている。

序 論

第1章 ドイツ帝国主義——大国政策から世界強
国政策へ——

第2章 ドイツと世界大戦の勃発——予防戦争と
奇襲論の演出

第1部 1914—1916年

第3章 電撃戦を期待して——ベートマン・ホル
ヴェークからクラスへ——

第4章 革命の促進——戦争方策と戦争目的——

第5章 国民の要求——ジャーナリスト・諸団体・
諸政党・王侯——

第6章 1915年における政治指導部の戦争目的政
策——沈滞から覇権要求へ——

第7章 1916年における政府指導部の戦争目的政
策——東西における単独講和の探索——

第8章 ドイツの戦争目的政策の対象。(一) ——
中央ヨーロッパ、従属国家とゲルマンの北
東ヨーロッパ——

第9章 ドイツと北アメリカ——潜水艦・全面講
和・ベルギー問題

第10章 戦争目的綱領——ドイツとその同盟諸国
(1916年11月—1917年3月)

以上の目次をみれば明らかなように、本書は、第1次世界大戦におけるドイツ帝国の国際政治・外交政策の方向を、イギリス、フランスおよびロシアの三大世界強国にたいする自己の覇権の確立という観点から把握し、まず何よりもこの未曾有の大戦争をひきおこした根源的な力が一体何であったかを読者に訴えようとしている。しかしそれよりも印象的なことは、第1次世界大戦は、それ自体、孤立した歴史的現象ではなく、ヒットラーによるナチスの政権掌握と第2次世界大戦の勃発との間に精神史的な関連を追求しているところに、きわめて大きな意味があり、本書の存在意義がある。

とくに、著者の「日本版への序文」は、本書の内容の全貌の要約を語って余すところがない。それによれば、本書の中心的テーマともいべき研究上の洞察は、著者がすでに1959年に、Historische Zeitschrift に論文として発表したものであり、それを契機として、Hans Herzfeld との間にはげしい論争が展開されることとなったといわれる。そしてその後、1961年に本書が出版されるや、著者の立場をめぐる賛否両論のはげしい論争が活発化し、一大センセーションがまきおこされたといわれる。

保守的な立場に立つドイツの大学教授たちのグループは、大きな驚愕と憤激の念をもって著者を迎えたのに反し、ドイツの新聞を中心とするジャーナリズムは、驚嘆と同時に、尊敬と承認の念をもって本書に接したのであった。従来、第1次世界大戦についてのドイツの立場は、英米仏を中心とする世界列強による「封じ込め政策」にたいする「防衛戦争」であり、その敗北の決定的要因は、国内における左翼諸政党による「背後からの一突き」であるとして、1914年におけるドイツの戦争責任は「無罪」であるとして考えられてきた。これにたいし著者の論点は、このような伝統的な観点をしりぞけ、第2次大戦後、アメリカ、イギリスおよびソ連が、戦利品として押収した歴史的な文書の返換によって、従来の通説を徹底的に打破し、第1次世界大戦の主要な推進者こそ、まさしくドイツであり、そこで決定的な polieymaker としての Bethmann Hollweg の役割を強調し、実に克明をきわめている。従ってこの解釈に従えば、ヴァイマル共和国の過程で、ナチ

スが政権を掌握し、やがて、侵略戦争を開始し、第2次世界大戦をひきおこした Adolf Hitler の政策は、第1次大戦の戦争目的政策と無縁ではなく、実は密接な関係があることを示唆することにはかならない。ところでこれは、ヒットラーの出現と、ナチスによる文明の破壊および野蛮残虐な行動が、ヒットラーという「狂気」による「不慮の災害」とする従来までの史観と真向から衝突するものであった。

すなわちこれによれば、1933年、ヒットラーによる政権の獲得と東ヨーロッパにたいする侵略行動は、この第1次大戦勃発時におけるドイツの戦争目的政策を伝統としてうけつづぐものであり、このことは、ヒットラーの政策が、第1次大戦以来のドイツの政策の延長線上にあったことを意味し、第2次世界大戦の責任が、ヒットラーの個人的な所業というよりは、ドイツ国民が全体として担うべきものであることを示唆していると思われる。この点について、本書のフランス訳(1970年パリ出版)の序文において、「ドイツ人の勝手気ままな歴史像を破壊した」と述べているのは正しい。

この著者は、政治学の専攻であり、経済学者ではないため、経済学的な視点からの分析という点ではきわめて不十分である。そこでつぎの諸点について指摘しておくことが必要であろう。

まず第1に、ベートマン・ホルヴェークを中心とする1914年以前のドイツの戦争目的政策の根底にある経済的要因とは、一体何であったか。著者は、序論、第1章ドイツ帝国主義——大國政策から世界強國政策へ——のなかで、「ビューロは、ドイツの力を効果的に投入することによって同盟国オーストリア—ハンガリーを擁護すると共に、トルコと結びつきが切れないようにしたい」と述べ、さらに、「ドイツは、オーストリア—ハンガリーをトルコへの橋渡しとして強化して、ヨーロッパ大陸におけるドイツの勢力の外交手腕による拡張に一段と意を注ごうとした」(21頁)と述べているが、こうしたドイツ外交政策の背後に横たわる経済問題は、一体何であったろうか。中欧に覇をとる世界強國の建設、のちに Hitler によって Lebensraum (生活圏) として唱えられたヨーロッパ世界の再分割にとどまっていたのか、それとも、それを超えて、たとえば中東地域の石油資源の獲得を第1義的に考えていたのであるか。あるいはその両者であったか、必ずしも明らかではない。

つぎに、19世紀以来、ドイツは、スラヴ人移民の圧力を、主として、ポーランドと境を接する地域に弊々

と感じていたが、このスラヴ人を東ヨーロッパのロシア領奥深く押しかえし、むしろ進んで、東ヨーロッパ地域に大規模な移民政策をとろうとしていたことは明らかである。こうした農業政策とドイツ帝国主義とは、一体どのような関係にあったのであろうか。こうした点が問題となるであろう。

しかし読者にとっておそらくもっとも衝撃的と思われることは、何といても、帝国主義政策の背後に横たわる「民族=血」の問題であろう。ラテン民族への軽蔑、アングロ・サクソンへの敵愾心、スラヴ人への恐れ、民族的偏見に深く彩られているドイツの支配者の態度のなかに、のちに Hitler によってうち出された民族差別政策の萌芽をみることができよう。それにも増して興味深い事実は、この当時のドイツ帝国のオーストリア—ハンガリー帝国にたいする圧力の強さである。

通説によれば、オーストリア皇太子夫妻の暗殺によって、セルビアとの関係が悪化し、この両国の間に戦端が開かれ、この両者と同盟関係にあったドイツおよびロシアが宣戦を布告し、同盟および協商側双方の世界的規模の戦争が惹きおこされたということであるが、本書は、このような通説を打破し、セルビアの戦争に消極的なオーストリア—ハンガリー帝国を圧迫して、局部的な戦争をひきおこし、バルカン半島において、ロシアにたいし決定的に優位に立とうとしたドイツの陰謀であることが明らかにされている。

歴大な資料を駆使した本書の叙述を読むと、第1次大戦は、決して避けられない戦争であったのではなく、十分に避けられた戦争のような感じを与える。ここに実は大きな問題がある。

本書によって国際政治的・外交的な交渉を迫る限りでは、戦争はまさにみずから招いたものであり、むしろ避けられるべきもののように考えられる。だが、経済的要因を考慮すれば、帝国主義戦争としての第1次世界大戦は、早晩避けられなかったのではないかという感想をもつであろう。いずれにしても、本書は、近來稀にみるすぐれた帝国主義研究の書である(1972年、岩波書店、B6判、398頁、1,400円)。

—1973. 8. 14. 深更—

飯田 鼎
(経済学部教授)